栃原岩陰遺跡マガジン

TOCHIBARA ROCK shelter site MAGAZINE

Vol.06
2023
March

北相木村の考古学最新情報と
考古学界隈のトレンドを紹介するフリーマガジン

CONTENTS

★特集▶知られざる縄文前期の世界
★学術論文▶
「長野県栃原岩陰遺跡から出土した
エイ類・サケ属、骨角製品、焼骨について」
吉永 亜紀子氏
★連　載▶北相木村に呼んでみました
三好 清超氏
★考古学リレーエッセイ▶
櫻井 秀雄氏
★北相木村考古学ニュース▶
栃原岩陰遺跡のオオカミ
★学芸員のフィールドノート

令和４年度　北相木村考古博物館報

特 集

知られざる縄文前期の世

中原遺跡の獣面突起（小海町）
（藤瀬雄輔氏撮影）

縄文前期という時代　北相木村で全国的に最も知られている遺跡は、本誌のタイトルにもなっている国史跡栃原岩陰遺跡である。この遺跡は主に11,000～9,000年前の遺跡として知られるが、これは縄文時代を大きく6つに区分した大別でいうと「早期」という時期に当たる。

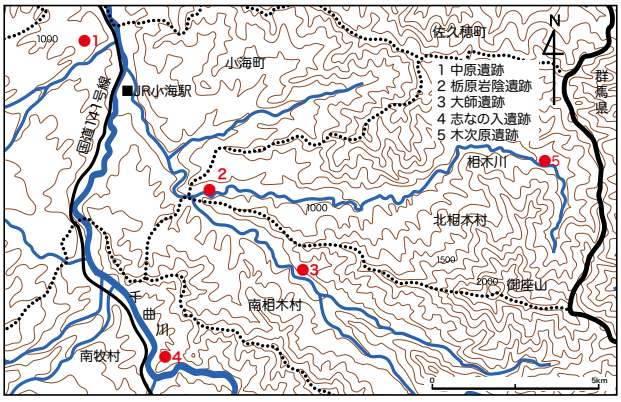
また、縄文「中期」と呼ばれる一千年紀は、長野県内でも最も遺跡の多い時期として知られるが、北相木村も例外ではなく、小規模ながら発掘調査のなされた坂上遺跡や、宮ノ平遺跡、跡芝遺跡などで、復元可能な土器も採集されている（芹沢2021）。

今回取り上げようとする縄文「前期」とは、この早期と中期の間、約6,500～5,500年前の時期を指す。一見地味で目立たない時期であるが、実は今、南佐久の縄文前期がにわかに注目されつつある。それは何故か？今回は、これまで取り上げられる機会の少なかった前期にスポットを当て、その課題を整理してみたい。

チャート石器工房　上記のように、一口に縄文前期といっても約1,000年という長い時間を指すが、ここでは、前半期と後半期に大きく分けて考えてみたい。

まずその前半期では、近隣では佐久穂町後平遺跡や小海町小原遺跡の調査で、この時期の遺物と共に竪穴住居址も確認されている。他にも、土器の採集地点は意外に多い。北相木村でも、群馬県上野村へ登るぶどう峠の入り口である木次原遺跡での調査例がある。

1999年の発掘調査は、狭い面積のトレンチ調査だったが、縄文前期前半の竪穴住居址１軒が確認された。そしてここでは、土器と共に多量のチャートが出土している。チャートというのは、北相木村を含む関東山地にも見られる石材で、石器の材料にされることも多い。調査での出土数は850点を超え、分析の結果、人頭大（重さ２～４Kg）の原石から、長さ２～３㎝程の石鏃を作っていたことが判明した。一方で、早期の栃原岩陰遺跡では盛んに使われていた黒曜石は、極小さな破片が１点出土したに過ぎない。



南佐久の主な前期遺跡

木次原遺跡のチャート石器（北相木村）

この頃に黒曜石をほとんど使わず、地元の石を多用したのにはそれなりの理由があろうが、人々の行動範囲や移動の頻度の違いがあるのではないだろうか。

なおこの時期、佐久地域含む東信地域では、北関東に多い縄文施文で粘土に植物の繊維をたっぷりと混ぜた厚手の土器が多いが、伊那や諏訪地方では、東海地方の影響を受けた無文で薄手の土器が多い。また諏訪地域では黒曜石の利用が普通で、八ヶ岳を挟んだ東西の地域差が、この頃には萌芽していたようだ。

土器、東京に行く　次に前期の後半期を見てみよう。前期前半に盛んに使われていた植物繊維を含んだ土器は次第に姿を消し、今度は竹管（細い筒状のものを半裁した工具）を多用した模様の土器が主流となる。これを研究者は諸磯式土器と呼ぶ。最初に研究された神奈川県諸磯貝塚に因んでつけられた土器型式名である。

実は南佐久地域では、この前期後半こそが、今注目されているのである。

まずは、1987～1993年に発掘調査された小海町中原遺跡を見てみよう。八ヶ岳東麓の広い台地に位置するこの遺跡では、諸磯式でも半ばにあたる諸磯ｂ式期を中心とした15軒の竪穴住居址が、中央の広場を取り囲むように直径約100mの輪を描いて並んでいた。中央部には200基を越す土坑（多くが墓穴の可能性がある）があり、所謂「環状集落」の様相である。

またこの集落には、実に多彩で多量の遺物が残されていた。多数の土器、黒曜石やチャートの石器、滑石の耳飾など、その全容をここで紹介することは難しいが、中でも見事なのが、諸磯ｂ式の大きな深鉢型土器だ。これは住居址から出土しており、残存率も高く往年の姿が復元されている。高さ約60㎝と巨大で、括れた胴部と口縁の四つの突起が特徴である。この突起、実はこの土器では簡略化されているが、そもそもはイノシシをモデルとして「獣面突起」とも呼ばれる。中原遺跡では、この他にも150にも及ぶ獣面突起が出土している。

なお、この見事な深鉢型土器は、2018年の東京国立博物館の特別展「縄文―1万年の美の鼓動」でも、全国選りすぐりの逸品の一つとして展示された。

この獣面突起の出自は群馬側にあり、この時期に流通

界

大師遺跡の諸磯式土器（南相木村）

した信州産黒曜石との関連も指摘されている。次に紹介する大師遺跡とともに、信州の歴史を語る上でも外せない遺跡であろう。

ここにもイノシシが　北相木村に隣接する南相木村では、これまで発掘調査例は少なかったが、2009年、村誌編纂事業の際にいくつかの遺跡が調査された。このうち大師遺跡では、やはり諸磯期の集落が確認されている。そしてここでも中原遺跡同様、多彩な遺物とともに、獣面突起が出土している。さらに関連がいわれる黒曜石については、蛍光Ｘ線分析による産地推定分析を行った。それによると、諸磯ｂ式の時期では信州産でも和田峠付近の黒曜石利用率が高まることが分かってきた。これは群馬県の大規模な遺跡と同様な傾向で、南佐久の遺跡が黒曜石の流通に係る可能性が見えてきた貴重な例である。今後の更なる研究に繋げたい。

前期の人骨　中原遺跡と大師遺跡、この二つだけでも前期後半の南佐久の凄さが伝わるが、南牧村に目を移すと、さらに驚きの発見が存在している。

南牧村役場から千曲川を渡ると、南相木村に通じる林道脇にいくつかの岩陰地形が見られる。1971年の林道開設工事の際には、この内の小さな岩陰から人骨と土器片が見つかった。当時、信州大学医学部により北相木村の栃原岩陰遺跡が発掘調査されていた関係もあり、同大により調査がなされた。これが南牧村の志なの入遺跡である。

この調査では、縄文時代早期末から前期までの土器片、黒曜石製の石器、ニホンジカやテン、ヒキガエルの骨等も出土したが、やはり注目すべきは人骨で、比較的保存状態の良い熟年の女性と、背骨の一部などのみと残存数が少ない性別年齢不詳の計２体である。

この人骨については、長らく正確な年代等は不明だったが、東京大学の米田穣氏による科学的な分析により、その年代は縄文時代前期後半、つまり先に紹介した中原や大師遺跡とほぼ同時期となることが分かった。（有坂2022）一方で墓域を伴う集落があり、他方では岩陰に人骨が眠る。そこにどんなドラマがあったのか。興味をそそられる部分である。

また、人骨はその食生を探る化学的な分析もされており、詳細な報告が待たれる。いずれにしても全国的に縄文前期人骨の発見例は少なく、貴重な資料であることは間違いない。

現在これらの人骨は、南牧村美術民俗資料館に収蔵され、展示に向けて準備中である。また出土した黒曜石製石器については、蛍光Ｘ線による産地推定分析が進められている。その他も含め、この遺跡の成果を活かす活動が期待されるところだ。

今後の研究に向けて　尚、北相木村内では、栃原岩陰遺跡で極小数ではあるが諸磯式土器が出土しており、やはり他の遺跡との関連を考えていく材料になるだろう。他にも南牧村野辺山高原の葭の頭遺跡では、この時期の

志なの入遺跡（南牧村）

多量の土器、石器が見つかっているという。

今後の展開次第では、南佐久地域での研究が、縄文前期（特に後半期）を考える上でキーポイントになるかも知れない。そんな思いを抱きながら、本特集が今後につながることを期待したい。

主な参考文献

南牧村教育委員会　1974『志なの入遺跡』

北相木村教育委員会　2003『木次原遺跡』

小海町教育委員会　2008『中原遺跡』

南相木村教育委員会　2016『大師遺跡　縄文時代編』

芹沢一路　2021「跡芝遺跡出土の縄文土器について－縄文時代中期の千曲川最上流域へのアプローチ－」『北相木村考古博物館報』vol.4 北相木村教育委員会

藤森英二　2021「千曲川－信濃川流域　諸磯式土器期の文化様相」『千曲川－信濃川流域の先史文化』津南町教育委員会編

有坂恭祐　2022「勝手に兄弟遺跡～栃原岩陰遺跡と志なの入遺跡～」『北相木村考古博物館報』vol.5 北相木村教育委員会

中原遺跡の諸磯ｂ式獣面突起付深鉢形土器（小海町）
（藤瀬雄輔氏撮影）

学術論文

長野県栃原岩陰遺跡から出土した エイ類・サケ属、骨角製品、焼骨について

吉永 亜紀子
（総合研究大学院大学　統合進化科学研究センター　客員研究員）

はじめに

栃原岩陰遺跡は、縄文時代早期を中心とする岩陰遺跡であり、長野県南佐久群北相木村東栃原の標高約 960m の川沿いに位置する（図 1）。多様な動物遺体と、それらを素材として製作されたさまざまな骨角牙製品、貝製品が良好な遺存状態で多数出土したことで知られる（北相木村教育委員会編 2019）。これら動物遺体を考古資料として活用するためには、同定作業（貝殻や骨が何の動物のどの部位であるか分類し決めていく作業）を行い、資料化する基礎的研究が必要不可欠である。そのため筆者は、縄文時代早期の山間部における動物資源利用や生業活動を明らかにする目的のもと、当遺跡から出土した未整理・未報告動物遺体の資料調査を 2017 年より継続的に実施している。本稿では、2022 年度に実施した資料調査で得られた成果を報告する。

調査対象資料と方法

第 1 次～第 15 次調査（1965 ～ 1978 年）において、調査区Ⅰ -0 ～Ⅲ -3（図 2）、出土レベル -420 ～ -530㎝の各地点から出土した動物遺体を調査対象として肉眼観察を行った。いずれも細かく割れた破片資料である。当遺跡は層位的に三つに大別されており、調査対象とした資料は「下部層」（縄文時代早期前葉・約 11000 ～ 10700 年前）に相当する資料である（北相木村教育委員会編 2019）。

結　果

同定標本数 (NISP) にして計 197 点の魚類遺体、両生類遺体、鳥類遺体、哺乳類遺体が確認された。当遺跡出土動物遺体は「シカ、イノシシに由来すると考えられる破砕骨が多い、焼かれている骨、スパイラル状の割れ口を呈する破片骨、解体痕が確認できる骨が多い」(利渉 2019) という特徴が指摘されており、当調査においても追認された。同定資料全点を記載した一覧表は、紙幅の都合上掲載できないため別稿に譲り、本稿では魚類遺体、骨角製品、焼骨ついて取り上げ以下に詳述する。

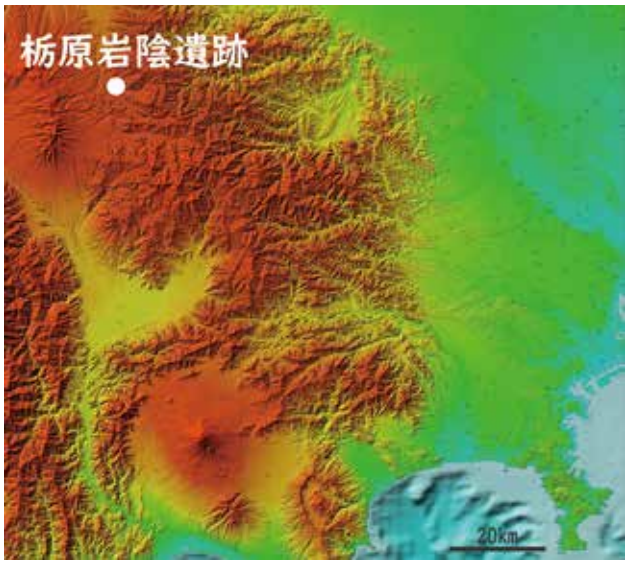


図 1 遺跡の位置 (地理院地図を改変)

【 魚類遺体 】

エイ類 尾棘（図 3）

資料番号 s36 出土区Ⅲ -3(奥の院)　出土レベル -425㎝

当遺跡では、淡水魚類であるサケ属とイトウの出土がこれまでに報告されているが (樋泉 2019・吉永 2022)、海産魚類の出土は当資料が初出となる。

部位は尾棘の破片であり、最大長約 30㎜を測る。焼けており、黒色～灰色を呈する。元来のエイ類の尾棘には両側に鋭利な棘が観察されるが、当資料の棘は磨耗または欠損している。棘の磨耗や欠損が何等かの使用によるものか、被熱によるものかは不明である。当資料は両端が欠損しているが、破断面に研磨などの加工痕は観察されなかった。筆者の私物であるエイ類尾棘現生骨格標本と比較検討を行ったところ、当資料はおおよそ図 4 点線で囲んだ範囲に相当し、尾棘の中央部に由来すると考えられた。

サケ属 左角舌骨（図 5 上段）

資料番号 ah47 出土区Ⅲ -2 出土レベル -520 ～ -530㎝

サケ属 破片（図 5 下段）

資料番号 ae3 出土区Ⅲ -1 出土レベル -500 ～ -510㎝

2021 年度資料調査 (吉永 2022) に引き続き、下部層（縄文時代早期前葉）から 2 点のサケ属を検出することができた。下部層からのサケ属内臓骨の出土は、当資料が初出である。筆者の私物であるサケ現生骨格標本（体長 63㎝）の左角舌骨と資料番号 ah47 を比較したところ、ほぼ同程

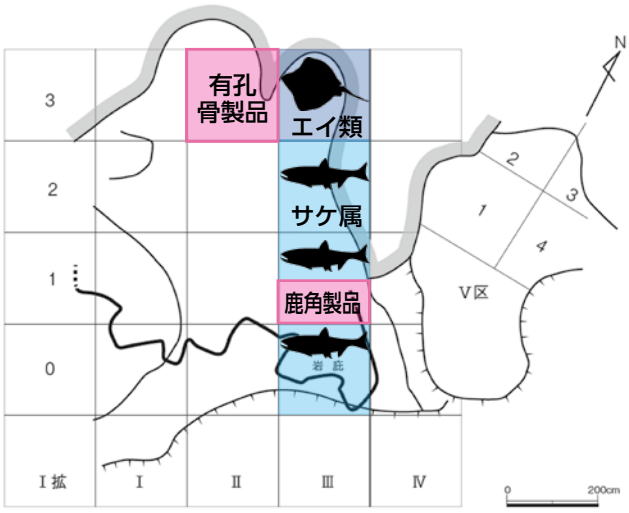


図2 調査区平面図と主な遺物出土区
(北相木村教育委員会（2019）に加筆)

図３　エイ類 尾棘

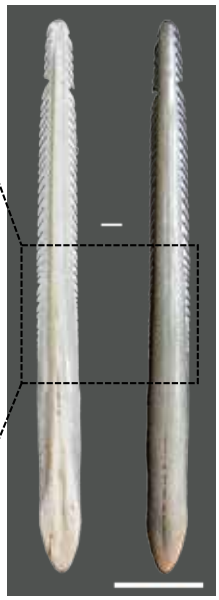


図４
エイ類現生骨格標本

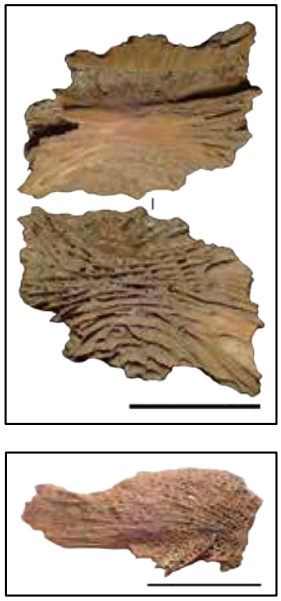


図５
上段 サケ属 左角舌骨
下段 サケ属 破片

図６　有孔骨製品
※スケールバーは、記載がある図以外はすべて10㎜

図７　破片資料と素材と
考えられる部位の一例

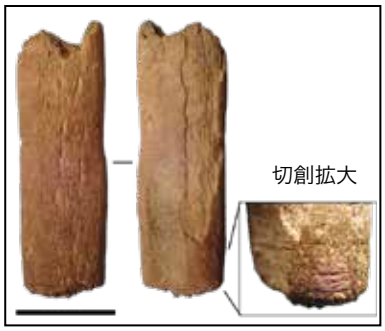


図８ 加工痕の残る鹿角

※スケールバーはすべて 10㎜

図９ 焼骨破片資料
資料番号 ae15 出土区Ⅲ -2
出土レベル -500 ～ -510㎝

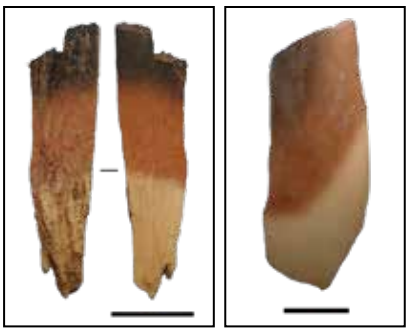


図 10 グラデーションを呈する焼骨

度の大きさであった。当資料も同程度の体長のサケ属に由来すると推察された。

【 骨角製品 】

有孔骨製品（図 6）

資料番号 s21 出土区Ⅱ -3 出土レベル -420 ～ -430㎝

大中型陸獣の四肢骨製で最大長 40㎜、幅 13.4㎜、厚さ 3.5㎜の扁平な骨製品である。当資料の約半分は焼けており、黒色、茶色、褐色のグラデーションを呈している。一端には、径約 4㎜の半円形の穿孔と研磨の痕跡と考えられる細かい線状痕が多数確認された（図 6 拡大❶❷❺）。破損箇所以外は、全体的によく研磨されており平滑で光沢が認められる（図 6 拡大❸❹）。何等かの利器であるのか装身具であるのか、器種や用途は不明である。当資料が検出された資料番号 s21 破片資料には、図 7 に示したように打割された四肢骨破片が多く含まれていた。図 6 拡大❸は、図 7 点線で囲んだような部位が素材に相当すると考えられる。北相木村教育委員会 (2019) に報告されている骨製品では、図 186-18 ヘラ状有孔製品（出土区Ⅰ -0 出土レベル -480㎝) に似るが、穿孔の数と湾曲した断面形が異なる。

加工痕の残る鹿角（図 8）

資料番号 ae10 出土区Ⅲ -1 出土レベル -500 ～ -510㎝

厚さ約 5㎜の扁平な棒状に加工されており、表面全体が研磨されている。最大長 27.8㎜を測る。両端が欠損しており、一方の破断面付近には加工痕と考えられる切創が観察された。鹿角製品の未成品と推察されるが器種は不明である。

【 焼骨 】

当調査の破片資料にも焼骨が多く含まれていた（図 9）。2021 年度調査において B タイプと分類したグラデーションを呈する色調に焼けた焼骨（吉永 2022）は、以下の位置から各 1 点が検出された。資料番号 s16 出土区Ⅱ -2 出土レベル -420- ～ 430㎝（図 10 左）、資料番号 s20 出土区Ⅱ -3 出土レベル -420- ～ 430㎝、資料番号 s27 出土区Ⅲ -2 出土レベル -420- ～ 430㎝、資料番号 s28 出土区Ⅲ -2 出土レベル -420- ～ 430㎝（図 10 右）、資料番号 ae10 出土区Ⅲ -1 出土レベル -500 ～ -510㎝。

まとめ

2022 年度資料調査では、海産魚類であるエイ類の検出が大きな成果といえよう。当遺跡と海岸線は、直線距離にして約 100㎞を測る（図 1）。一体どこから、どのような目的をもって当遺跡にもたらされたのだろうか。尾棘には毒があり可食部も伴わないことから、食料利用を目的として沿岸部から搬入されたとは考え難い。これまで報告されているタカラガイ類やハイガイなど海産貝類遺体との関連性を考える必要があると共に、海のない山間部へもたらされた文化的コンテクストを搬入ルートと併せて考えていく必要があろう。隣県の群馬県桐生市不動穴洞穴でもエイ類尾棘 1 点の出土が報告されているが、時期不詳である（不動穴洞穴団体研究会編 2022）。サケ属の出土分布傾向は、これまでの研究において「中部層」に多い傾向が指摘されている（樋泉 2019）。「下部層」からサケ属資料を検出し蓄積していくことは、当遺跡における漁撈活動とサケ利用のあり方を検討する上で重要である。陸獣に由来する骨片では、2021 年度調査に引き続きグラデーションを呈する色調に焼けた焼骨 (図 10) と有孔骨製品（図 6）を検出することができた。このような遺物は、当遺跡の骨製品製作や、多量に出土している大中型陸獣骨がなぜ割られているのか、なぜ焼かれているのかを考える上でもさまざまな示唆を与えてくれる。今後も引き続き当遺跡に残された細かい破片資料の精査を進め、当遺跡の動物資源利用や生業活動の一端を明らかにする手掛かりを探っていきたい。

謝辞

資料調査に際し藤森英二氏（北相木村考古学物館）に御協力を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

参考文献

北相木村教育委員会 2019『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書』北相木村教育委員会

樋泉岳二 2019「魚類・両生類・爬虫類遺体」『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書』北相木村教育委員会

不動穴洞穴団体研究会編 2022『不動穴洞穴発掘調査報告書』不動穴洞穴団体研究会

利渉幾多郎 2019「哺乳類遺体」『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書』北相木村教育委員会

吉永亜紀子 2022「栃原岩陰遺跡から出土した動物遺体破片資料と焼成による色調変化を装飾に利用した可能性のある被熱骨製品について」『北相木村考古博物館 研究紀要 第 3 号』北相木村考古博物館

栃原岩陰遺跡出土オオカミ骨の DNA 解析

北相木村考古学ニュース

栃原岩陰遺跡からは、現在日本列島では絶滅したオオカミの骨資料が出土しています。
今回、このうち1点の資料について DNA の抽出と解析が行われ、これが大陸系のオオカミであるという結果が得られています。

研究の目的と方法

日本列島には、明治中頃まで北海道にエゾオオカミが、本州、四国、九州にはニホンオオカミが棲息していました。この内ニホンオオカミは、エゾオオカミや大陸のハイイロオオカミに比べて小型であることで注目されてきました。

一方、本州の後期更新世の石灰岩採掘場からは、形態的に大きい大陸系の化石オオカミの骨が出土しており、以前よりニホンオオカミの起源について、後期更新世の化石オオカミが小型化したものなのか、それとも更新世のオオカミとは別の小型のオオカミなのかが議論されてきました。しかしこの時期の資料が少なく、解決には至っていません。

そんな中、縄文時代早期の栃原岩陰遺跡から出土したオオカミ骨資料は、時代的にみて両者の関係を探る貴重な資料となります。

総合研究大学院大学統合進化学研究センターの石黒直隆、寺井洋平、本郷一美の３氏は、保存状態のよい栃原岩陰遺跡出土のオオカミの歯（下顎第1大臼歯）から DNA を抽出することで、この問題に挑みました（図１）。

図1　DNA分析に用いた下顎第1大臼歯(M1)
下顎第1大臼歯の遠心根側の先端をDNA抽出液につけることにより非破壊でDNAを抽出した。

表1　下顎第1大臼歯（M1）のサイズの比較（歯冠長 mm）

栃原岩陰遺跡オオカミ	後期更新世化石オオカミ	縄文早期佐川オオカミ	縄文後期～近世ニホンオオカミ
28.3	29～34.5	26.8～27.5	24～26.6

分析は大きく分けて2つで、まずミトコンドリア DNA(mtDNA) を解析する事で、大陸系（シベリア系）のオオカミかニホンオオカミかを大まかに鑑別します。また現在も、次世代シーケンサーによる核ゲノム解析を進めており、これによりニホンオオカミ由来の遺伝子の有無を調べています。

分析結果

栃原岩陰遺跡出土のオオカミの歯は縄文早期の遺跡から分離された資料としては保存状態が極めてよく、DNA の抽出がうまくいっていることは、通常の PCR で mtDNA の配列が増幅・解析できたことからも明らかです。そして、PCR で得られた mtDNA の塩基配列はニホンオオカミの配列を示さず、大陸系（シベリア系）の配列を示しました。つまり栃原岩陰遺跡のオオカミは、大陸系オオカミと思われる結果が得られたということです。

また本資料は歯冠最大長からみて、後期更新世の化石オオカミのグループに属す可能性が十分に考えられますが（表１）、更新世のオオカミとしては小さめです。本資料が縄文早期の層から出土したことを考慮すると、どの程度ニホンオオカミと関係を有するかが注目されますが、これは核ゲノムの解析を待たなければなりません。

今後の展望

最近の報告では、ニホンオオカミは、更新世の化石オオカミと大陸から新たに渡ってきたハイイロオオカミの集団との交雑により成立したとされています。果たして、縄文早期のオオカミはニホンオオカミの遺伝子を有していたのか？極めて興味ある問題点です。その意味で、現在進行中である核ゲノム解析の結果は、今後重要な情報を提供するものと思われます。

連載企画　北相木村に呼んでみました

今日はこの人

飛騨みやがわ考古民俗館学芸員

三好 清超（ミヨシ セイチョウ）さん

石棒クラブってなんだ？

岐阜県飛騨市。人口約22,000人の街でも、人口減少が懸念されるという。その飛騨市に、なにやらおそろしく元気な学芸員がいるという。

その伝説の学芸員が、北相木村にやって来た！ その目的は？そして、彼の目指す地平とは？

学芸員F：三好さん！いつの間に来てたんですか!? 北相木考古博物館に。

三好：報告書※1を拝見しました。大著でした。藤森（学芸員F）さんが日々向き合っておられ、大切にされている史跡と博物館を見学したいと感じました。
また、個人的に勉強している古代の瓦で、長野県安曇野市から山梨県甲斐市へ伝播したと考えられているものがあります。これまで諏訪経由と考えていたのですが、佐久平経由の可能性はないのかなと考え、一度あの道を通りたくなりました。

F：真面目すぎますね。でもお忍びで（笑）

三好：お忍びではなくて、突然訪問して驚かせようと思ったら御不在でした。学芸員なのに土日不在なんて！

F：そ、それは申し訳ない。ところで、展示の感想はいかがでしたか？

三好：資料数と調査の蓄積に驚きました。そして、調査研究のために展示から外れている資料もありました。今なお調査が進行中だと。報告書刊行を皮切りに博物館施設として調査を進め、価値を高める活動が垣間見られ、尊敬の念を抱かずにはいられませんでした。

F：誉め殺しですね（最近サボってるしなぁ、研究とか）。そうそう、わざわざ質問ボックス※2に質問感想を頂きました。その意図は？

三好：僕は他の博物館を訪れて、学芸員に直接質問できることは、これまで多くありませんでした。それが、不在の時でも、学芸員と繋がりを持てることを意図されているのかと考えました。それが合っているのか？ぜひ、聞いてみたくなりました。

F：いやぁ、どうしても不在の時間ができてしまうので苦肉の策というか、姿勢だけでも示そうという感じですね。やっぱり質問されて行く方は多いですから。
さて、突然学問的な話題ですが、飛騨市でも栃原岩陰遺跡と同時代の縄文早期の素晴らしい遺跡※3があります。今回のご来館で、何か参考になりましたか？

三好：資料群の相違点として、動物遺体・骨製品が多いことが挙げられます。土壌的に、飛騨市の遺跡では残っていなかったのか。見つからないことと無かったことは異なるのではないかと気付かせてもらい、大いに参考になりました。

F：「見つからないことと無かったこと」。これは重要な視点ですよね。つい忘れがちです。
そうそう、これはぜひ聞いておかないと。現在先進的な取り組みを展開している飛騨市ですが、その概要をぜひ。**石棒クラブ**ってなんですか？

飛騨みやがわ考古民俗館での VR 体験。ナウい！

三好：**石棒クラブ**は、飛騨みやがわ考古民俗館を舞台に活動する団体です。活動の特徴は、市民参加で博物館情報を取得し発信することです。
Instagram での一日一石棒は、塩屋金清神社遺跡で見つかった1,074本の石棒をほぼ毎日一本ずつ紹介しています（#sekiboclub）。
また、石棒の裏側・底面も観察できるよう、Sketchfab や名古屋大学で開発中のカルプティコンで3D データを公開しています。
このデータ取得作業のプロセスで、参加者は石棒に触れることができます。博物館資料に直接触れる機会を通じて、飛騨みやがわ考古民俗館を大切に思うファンが増え始めました。
このようなファンを増やし、人口減少が著しい飛騨市で小規模ミュージアムを存続させる姿を示すことができれば、全国の先進事例になると信じて活動を継続しています。

F：立派すぎて、なんだかこちらは恥ずかしいです。恥を忍んでお聞きしますが、何か来館者を増やす方策をぜひ教えてください。

三好：来館者を増やす必要があるのか、と考え初めています。僕が感じた北相木村考古博物館の価値を感じるには来館する必要があると思います。でもそれは一面で、来館せずに別の価値を感じる方がいる可能性もあると考えます。誰にどのような価値を提供しているのか、まずは現状を整理してニーズを把握すれば、ひょっとして来館だけが博物館の価値を高めることではないかもしれません。そこを一緒に突き詰めましょう！

F：（い、一緒？同じレベルでは無理っぽい…。）まぁ都市部からは離れた博物館同士、知恵を出し合いましょう。

※1『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書　第1次～第15次調査（1965 ～ 1978）』…北相木村教育委員会が2019年に刊行し、これまでの栃原岩陰遺跡の調査研究の成果をまとめた報告書。
※2質問ボックス…北相木村考古博物館では、学芸員不在の時間も多いため、来館者の質問を拾えるように、質問用紙とそれを入れる箱を設置している。もちろんお返事を出しますよ。
※3縄文早期の素晴らしい遺跡…飛騨市沢遺跡を指す。早期中頃の沢式土器の標識遺跡で、栃原岩陰遺跡でも沢式が確認されている。

古民家で AR 看板。3D 合宿にて。囲炉裏を囲んでご飯の時間にこれです。

栃原岩陰遺跡と佐久の国史跡

遺跡は「歴史の舞台となった場所」

のことです。ですから、埋蔵文化財の他にも、城跡や街道・宿場、社寺跡、合戦場跡、近現代の学校や工場・役所・著名人の旧宅、戦争の痕跡を示す場所なども遺跡ということになります。

こうしたさまざまな遺跡のなかでも、将来にわたって保護していく必要がある特に重要なものは、国が「史跡」に、県や市町村でもそれぞれ「県史跡」・「市町村史跡」として指定し、保存・活用が図られています。なお、史跡・名勝・天然記念物の国指定制度は大正８（1919）年の史蹟名勝天然記念物保存法により始まりました。歴史の舞台となった遺跡の代表的なものが史跡だと言えるでしょう。また、文化財のなかでも、土地・不動産についての指定と言うこともできます。全国で発掘調査は毎年約9,000件程度が行われていますが、そのほとんどは道路や建物などの土木工事で壊されてしまう遺跡の記録を残すための調査ですので、歴史の舞台となった場所に立ち、当時を思い起こすことができる史跡はとても貴重なものです。

埋蔵文化財だけではなく、長和町と南木曽町の中山道は宿場・本陣に加えて道そのものも国の史跡に指定されていますし、世界遺産となった群馬県の富岡製紙場や広島の原爆ドームも国指定の史跡としても保護されています。

昭和40（1965）年に発見された栃原岩陰遺跡は、約11,000～9,500年前の縄文時代の早期に人々が活動した場所です。有機物は溶けてしまい残りにくい酸性土壌が一般的な日本ですが、岩陰という立地環境のため、おびただしい量の土器や石器の他にも出土事例が稀少な12体もの人骨をはじめとして、骨角器や貝製品、動物骨などの重要な考古資料が出土しました。

そして、栃原岩陰遺跡は昭和62（1987）年に国史跡に指定されました。この国史跡は現在のところ、長野県内で38件が指定されていますが、そのうち６件が佐久地域にあります。

南牧村の矢出川遺跡

は、日本で初めて旧石器時代の細石刃石器が発見され、旧石器時代最終末にあたる約17,000年前に日本でも細石刃文化が存在していることを明らかにしました。平成７（1995）年に国史跡に指定されました。長野県内で旧石器時代の国史跡は矢出川遺跡ただひとつです。小諸市の寺ノ浦遺跡は昭和５年に発掘調査が行われ、昭和８（1933）年という古い時期には国史跡に指定された縄文時代中後期の集落遺跡です。史跡としては「寺ノ浦石器時代住居跡」という名称となっています。指定から80年たった平成26（2014）年からは範囲確認調査が小諸市教育委員会により実施され、ちょうど90年目に当たる本年3月にはその調査報告書が刊行されました。ちなみに「縄文時代」が教科書に載ったのは、昭和20年代後半のことであったため、それ以前は縄文時代の史跡は、「石器時代」という名称であり、昭和32年に指定された青森県の是川

史跡寺ノ裏遺跡（小諸市）浅間南麓の縄文中後期の集落跡

史跡大深山遺跡（川上村）日本でも有数の高地にある縄文集落

遺跡が最後の「石器時代遺跡」ということです。寺ノ浦遺跡と同時に国史跡に指定された東御市の戌立遺跡も史跡名称は「戌立石器時代住居跡」ですし、有形文化財の国宝に当たる存在が特別史跡になりますが、県内唯一の特別史跡の尖石遺跡も「尖石石器時代遺跡」が史跡の正式名称となっています。

川上村の大深山遺跡

も縄文時代中期の集落遺跡で、昭和28（1953）年から地元の方が岡谷市出身の考古学者である八幡一郎氏の指導を受けながら調査や保護活動を進めてきたことでも特筆されますが、昭和41（1966）年に国史跡に指定されました。こちらにはすでに「石器時代」という名称はついていません。川上村では保存活用計画を作成し、大深山遺跡の新たな保存活用を進めていこうとしています。

佐久市の龍岡城跡は、明治維新の前年の慶応3（1867）年に竣工された、函館とともに日本で2つしかない星形城郭で、「五稜郭」という方がなじみ深いかもしれません。こちらも国史跡に指定されたのは、昭和９（1934）年という古い時期にあたります。長らく田口小学校が城跡を利用されてきましたが、本年3月で閉校となり、本格的な史跡整備が始まろうとしています。

同じく佐久市の旧中込学校は、明治８（1875）年に完成し、現存する国内最古級の擬洋風建築物です。国宝に指定された松本市の旧開智学校の完成が明治９（1876）年ですから、旧中込学校の方が古い建物です。旧中込学校は、建物は昭和44（1969）年3月に国重要文化財に指定され、またその土地は昭和44年4月に国史跡に指定されるという、2つの国指定をもつ稀有な文化財です。歴史の舞台となった場所としても、建造物としてもその歴史的な価値が高く評価されているわけです。

このように栃原岩陰遺跡をはじめとする国史跡はどれも優れた内容をもつものばかりです。たまには歴史の舞台となった場所に訪れてみませんか。

栃原岩陰遺跡が発見された昭和40年は私が生れた年にあたります。また、国史跡に指定された昭和62年は、私が大学で考古学研究室へ入り、考古学を専攻することになった年です。そして現在、栃原岩陰遺跡を発見した輿水利雄さんと新村薫さんも牽引してきた佐久考古学会で事務局長を務めていることにも何か縁のようなものを感じています。

櫻井 秀雄（Sakurai Hideo）

長野県小諸市出身。長野県埋蔵文化財センターに勤務し、佐久地域を含む県内各地の遺跡を調査。公務以外でも、自身の研究テーマである古代の祭祀を中心に、精力的な調査活動を行っている。そして、粋笑亭洒落駒という高座名を待つ落語家でもあり、穏やかな人柄は誰からも愛されている。佐久地域、長野県の考古学を支えている一人である。

学芸員のフィールドノート

発掘調査報告書『木次原遺跡』
2003 北相木村教育委員会

当教育委員会の人員不足により、今年度の本誌は通常の16ページではなく、12ページでの発行となりました。また残念ながら、姉妹紙である『北相木村考古博物館研究紀要』は刊行を見合わせています。その他、イベント等も中止せざるを得ない状況で、多くの方からお叱りや励ましを受けました。

それでも本誌については、お陰様で今号も内容は充実したものと自負しています。

特集では縄文前期を紹介。栃原岩陰遺跡は縄文早期、そして信州の縄文といえば中期が定番ですが、その狭間の時期である前期も捨てたものではありません。今後の展開も楽しみな南牧村志なの入遺跡の例も含め、そのことを少しでもお伝え出来たでしょうか。

また継続的に栃原岩陰遺跡の動物遺体の調査を続けている吉永氏は、今年もその成果を発表してくれました（例年では『研究紀要』に掲載）。特にエイの骨の発見は特筆事項で、栃原岩陰遺跡の可能性を感じると同時に、吉永さんの努力に敬意を表します。

「博物館ニュース」で概要をお知らせした、オオカミについての研究も非常に重要です。栃原岩陰遺跡では絶滅した（であろう）哺乳類としてニホンカワウソとオオカミが確認されていますが、このうちオオカミについて、今回の分析ではニホンオオカミではなく、大陸系のオオカミである可能性が示されました。完新世初期の動物相を探る重要な見解と言えます。

連載コーナーに登場頂いた、岐阜県飛騨市教育委員会の三好清超氏は、文化財担当公務員のスーパースター。このような方に来館頂いたことは、当館にとっても嬉しいことでした。エッセイを寄せて頂いた櫻井秀雄氏は、地元佐久考古学会の牽引役でもあり、今回は佐久地域の国史跡を紹介してもらいました。

たくさんの方に支えられ、当館は成り立っています。今後も博物館としての活動を、細々とでも続けたいと思います。皆様のご支援、お願いいたします。

北相木村考古学博物館学芸員　藤森 英二

北相木村考古博物館
〒384-1201
長野県南佐久郡北相木村2744
☎ 0267-77-2111
http://vill.kitaaiki.nagano.jp/museum/

令和４年度 北相木村考古博物館報
栃原岩陰遺跡マガジン vol.06
令和５年３月刊行

企画編集　藤森 英二
（北相木村考古博物館学芸員）
発　　行　北相木村教育委員会
印　　刷　中澤印刷株式会社

正誤表

・2 ページ　本文 12 行目　誤）約 6,500～　正）約 7,000～
・10 ページ　写真キャプション
　誤）史跡寺ノ裏遺跡（小諸市）　正）史跡戌立遺跡（東御市）